

口 頭 弁 論 要 旨

京都市下京区にすんでいる、吉永剛志と申します。

京都市にある NPO 法人使い捨て時代を考える会の常任事務局と、この NPO がつくっている有機農産物宅配会社、安全農産供給センターの役員をやっています。会員数は 1500 人程度です。有機農産物を扱っている関係から、京都近辺の有機生産者やそれにとどまらず農業関係者によく会います。

もしも、若狭の原発に事故が起こったら、この一生懸命仕事している有機農家たちはどうなるのだろうか、私はそう考えるときがあります。空想でしょうか。心配しすぎでしょうか。

【有機生産の特徴と生産者の増加】

そもそも有機農業とは何でしょうか？簡潔に定義すると、無農薬・無化学肥料で、小規模多品目の栽培をする農法です。過度な農薬と化学肥料は人にも自然にも害を与える。そうではなく、人間にも環境にも優しい農業はないのか、として生まれたのが有機農業です。

はじめた 1970 年代当初は変わり者扱いされました。そもそも農業基本法の枠の発想の外の生産です。誰も頼ることができません。市民運動の力を借りて、独自に市場と流通を創り出しました。そのような努力が実り、市民権を得、21 世紀になって有機農業推進法もできました。現在の気候変動の状況下、政府は今年になって 2050 年までに有機農業のシェアを現在の 0.5% から 25% に広げると発表しました。有機農業は日本農業の主流になっていくでしょう。

いま京都の北部には、京都府内外から I ターンの若い有機生産者たちが、どんどん生まれています。2017 年 11 月に百姓一喜という集まりが、使い捨て時代を考える会所有の南丹市交流の家でもたれ、京丹後、舞鶴、綾部、南丹、亀岡などなどから 110 人もの方が集まりました。これら生産者を結び、点を線にして、京都市の消費者に野菜を届けようとするキョートオーガニックアクションという団体も生まれています。慣行農法の従事者が高齢化、後継者不足に悩む中、有機農業・自然農法に希望を持って就農してくる若者が増えています。環境的にも経営的にも持続可能有機農業というのは魅力的で、困難もあるだろうが、仕事に誇りを持って取り組みたいからこの道をあえて選んだ、そういう声も直接聞きました。

【原発事故が起きた場合の避難困難性】

私は 2011 年 3 月 11 日直後、つきあいのある福島の有機農家を訪れました。私が福島で見た生産者はすでに、今まで築いた供給ネットワークを「安全ではないから」と言う理由で半分以上失っていました。無論高額の代金を払い、放

射能検査はしているにもかかわらずです。彼らにまったく原因のない原発事故で、今まで築き上げてきた仕事の成果を毀される。安全/安心なものをつくらうと人より一生懸命だったからこそ、原発事故は一層打撃がおおきかったです。

私は思うのです。もし若狭で、原発事故が起こり、琵琶湖が汚染され、京都の田畑が汚染されたらどうなるか。京都駅から若狭の原発群まで60キロくらいの距離で、私が訪れた福島の農家の福島第一原発からの距離と変わりません。

今まで苦労して育てあげてきた土壌をすて、土地を移動し、果たしてよそで農業ができるでしょうか。有機栽培をするための土壌をつくるのには、始めるだけでも数年の期間が必要で有り、毎日、土の手入れをしなければならず、有機栽培をする土壌の土作りには終わりはありません。また、作った野菜を売る顧客は、基本は、ロコミです。すぐに、顧客が獲得出来るわけではありません。長い年月を掛けて、信頼を勝ち取りながら、野菜を売ることとなります。

私の知っている南丹市胡麻の13代にわたる農家で、自分の代になって有機農業に転換し、京都府の有機農業農政「人と環境にやさしい農業推進プラン」策定にも参加した人がいます。今では20代前半の娘さんが、後を継ぎたいと就農しています。彼が自分の代だけでも、どれだけ土壌を大事にしてきたか。どれだけ水の管理やほかの集落の人とのつながりを大事にしてきたのか。田植えの時の、田にはられた水の下の土のでこぼこを、手と足で感じながら、いかに田植えや草取りするかの彼の言葉を聞くだけでも伝わるものがありました。そういう彼ら彼女らが原発事故が起こったらどうなるのか。「残念でしたね。避難してください、逃げてください。はい逃げました」、とできるのか。できないと思います。たとえできたとしても、今まで築いてきた、供給先（顧客）など全て失います。

若狭に原発事故が起こり、京都の有機生産者に福島の生産者たちと同じ思いを繰り返させたくありません。私はそう強く思います。

原発に力を入れるよりも、かれら有機農家が動きやすく、将来性がある環境を作ることの方が、よほどこれからの社会のためになる、私はそう思います。

以上